

## 異文化間コミュニケーションの視点から見た 発達障がいと発達支援

山本登志哉（発達支援研究所）

### 問題の設定

- ⇒ 「発達障がい」という概念は歴史的に形成され、その分類や診断基準も常に揺れ動き続けるもの
- ⇒ 生物学的本質主義に陥らずに共同主観的現象としてダイナミックに「発達障がい」とその「支援」を考える必要
- ⇒ 「定型」の持つ自己中心的視点を超えて、「障がい者との共生」を考える理論的視点とは何か？

### 話の進め方

#### I. 基本概念の説明

EMS（拡張された媒介構造）    ディスココミュニケーション  
共同主観性                      機能的実体化

#### II. EMSによる「障がい」の固定的実体化のしくみの説明

#### III. ディスココミュニケーション事態としての「障がい」の理解

#### IV. 当事者間の相互的な「調整過程」としての「支援」

### I ヒトのコミュニケーションの基本構造

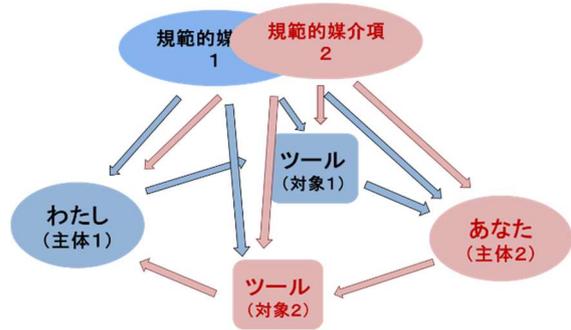
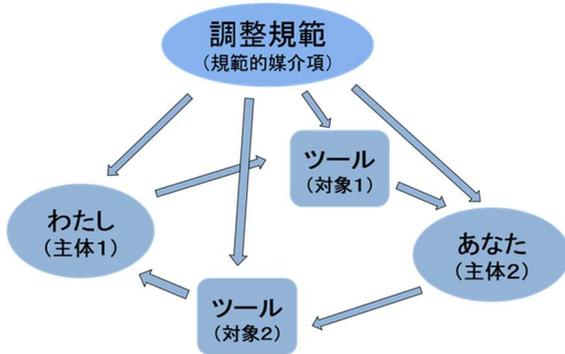
(1) ツールによる関係調整

(2) 能動=受動構造の中で応答する主体としての人。

「受動相」の重視 cf. 浜田寿美男 鯨岡峻

(3) ヒトのやりとりの基本構造：会話（発話交換）・贈与交換・市場交換

(4) 拡張された媒介構造（EMS:Expanded Mediatl Structure）



役割主体としてのわたしとあなたが意味づけられたツールを規範的に媒介（調整）されて交換する形（上左図）

(5) ディスコミュニケーション dis-communication

異質な論理に生きる者同士の接触（上右図）

(6) 共同主観性 communal(or collective) intersubjectivity

社会的に生きる精神のありかた

主観は第三者的に共有されるとき規範的に実体化し、安定

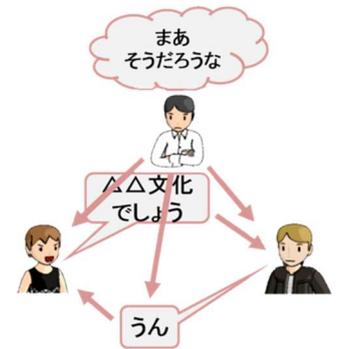
(7) 機能的実体化 Functionally Substantialization

社会的実践の制約構造

共同主観的な意味付けの共有と機能的実体化

物理的実体性と機能的実体性：主観の構造化と客観性

対象操作構造の第三者的確認 VS 意味の共有構造の第三者的確認



### ここまでの話のまとめ

- ⇒ ヒトはツールを使って交換＝やりとりを行う
- ⇒ 交換の中でツールは他者の意図（意味）を表す記号として機能する
- ⇒ 役割を持った主体による、適切な意味解釈と行為の仕方＝規範がやりとりを調整するEMSの成立によってやりとりは安定性を獲得する
- ⇒ 社会的実践を成り立たせるEMSの形成と維持の過程に主体が参与するとき、その関係性が実体的に機能し始める
- ⇒ このとき、関係が主体の「外部」から「客観的」に主体を制約する、という機能的実体化が起こる。

## II 「障がい」の非実体性と実体性 発達障がいをメインに

(1) 障がいの非実体性： 「障がい者」内部の固定的実体ではないこと

- (2) 障がい認定の二型：「客観性」幻想 「社会的に承認された恣意性」  
「平均」からの偏差 or 「社会適応」のレベルの判断
- (3) 障がいの実体性  
「脳」へのアプローチが一定可能であること（生物学的）  
「生きづらさ」が説明されること（主観的）  
診断が社会的行為・処遇の構造を変えること（社会的）

### Ⅲ ディスコミュニケーション事態としての「障がい」の理解

- (1) 「不適応」＝「障がい」現象の生成現場
- (2) EMS に生ずるズレの三つの調整形式
  - ① 関係の解消 ② 抑圧的關係の形成 ③ 規範の相互調整
- (3) ディスコミュニケーションと不適応：二つの障がいへの姿勢
  - ① 「障がい者」＝「不適応者」  
⇒ 「基準」からの逸脱者としての「障がい者」  
療育の目的 ＝ 「基準」に近づけること
  - ② 「障がい」＝「ディスコミュニケーション」  
⇒ 「基準の相互的なズレ」としての「障がい」  
療育(?)の目的 ＝ 「基準」を調整すること

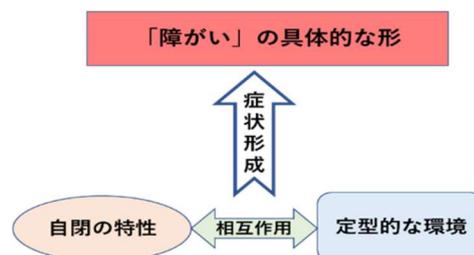
### Ⅳ 当事者間の相互的な「調整過程」としての「支援」

- (1) 「障がい者」の実体化の仕組み
  - 1) 自己基準の絶対化の二つの代表的パターン
    - ① 二次障がいの原因となる、定型側による「常識・当たり前・普通」のおしつけ
    - ② カサンドラ症候群の原因となる、アスペルガー一夫による定型妻の感覚否定

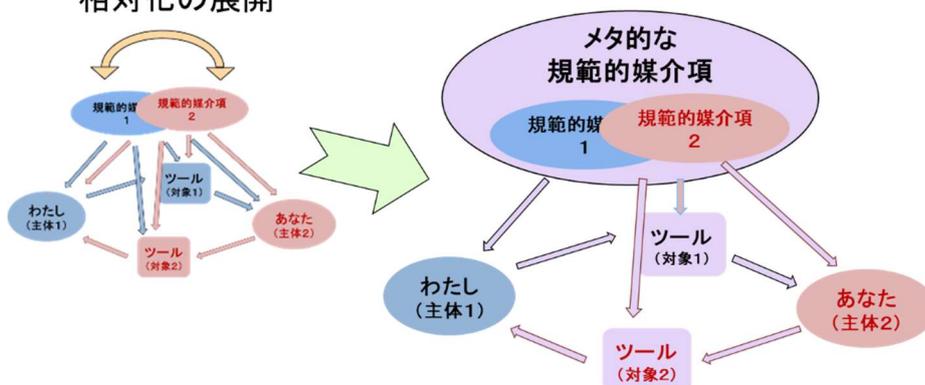
## 2) 力の差異と抑圧的關係調整

### (2) 「障がい」の非実体化と対話的再実体化の模索

- 1) 欠如論と形成論 浜田寿美男
- 2) 発達障がいを見る視点の歴史的变化
- 3) 外在的な治療の視線：「障がい」の「発見」
- 4) 内在的な語り：「当事者本」の出現と普及
- 5) 内在的視点の対象化：「当事者研究」の展開
- 6) 相対化の進展



### 相対化の展開



- ① 「治療」という視点の否定
- ② 表現する「主体」としての「当事者」の出現
- ③ 「お互い」の問題としての発達障がい

### (3) 課題

- 1) 対話的調整の模索時に考慮すべき「異質さ」
- 2) 対話的調整の際に出会う困難
  - ① 「多数派」と「少数派」に生まれる「権力関係」
  - ② 「被害者認識」と「加害者意識」の非対称性
  - ③ 「ケア（援助）」に含まれる「上下関係」の問題
  - ④ 「相対化」に伴う「自己否定の痛み」の問題
  - ⑤ 身体化された倫理感覚からの抵抗感